





表5-2 幼児の社会的ルールの理解

A <借りたもので友達を押す>のは、良いことですか？ いけないこととした人は、その理由は？

回答	年齢	3歳	4歳	5歳
良い		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		3 (17)	0 (0)	0 (0)
叱られる		1 (6)	0 (0)	0 (0)
いけないこと		1 (6)	0 (0)	0 (0)
友達を怪我する		12 (67)	19 (91)	21 (100)
泣く		1 (6)	2 (9)	0 (0)
他		1 (6)	2 (9)	0 (0)
計		18	22	21

B <砂場で友達を作っている山を壊す>のは、良いことですか？ いけないこととした人は、その理由は？

回答	年齢	3歳	4歳	5歳
良い		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		3 (17)	0 (0)	1 (5)
叱られる		4 (22)	2 (9)	0 (0)
いけないこと		7 (39)	11 (50)	0 (0)
友達を困らせる		3 (17)	7 (32)	20 (95)
壊れる		0 (0)	0 (0)	0 (0)
他		1 (6)	2 (9)	0 (0)
計		18	22	21

C <ブランコで遊ぶときに順番を守らないのは、良いことですか？ いけないこととした人は、その理由は？

回答	年齢	3歳	4歳	5歳
良い		1 (6)	0 (0)	0 (0)
無答		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		6 (33)	0 (0)	3 (14)
叱られる		3 (17)	3 (14)	2 (10)
いけないこと		6 (33)	9 (41)	1 (5)
あふない		1 (6)	3 (14)	5 (24)
友達を困らせる		2 (11)	3 (14)	5 (24)
秩序が乱れる		0 (0)	2 (9)	1 (5)
ルールだから		0 (0)	1 (5)	3 (14)
壊れる		0 (0)	0 (0)	0 (0)
他		1 (6)	1 (5)	0 (0)
計		20	22	21

D <園に家のおもちゃを持ってくるのは、良いことですか？ いけないこととした人は、その理由は？

回答	年齢	3歳	4歳	5歳
良い		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		0 (0)	0 (0)	0 (0)
無答		1 (6)	0 (0)	2 (10)
叱られる		9 (50)	8 (36)	3 (14)
いけないこと		1 (6)	2 (9)	0 (0)
園におもちゃがある		3 (17)	4 (18)	12 (57)
友達がおもちゃを壊す		2 (11)	8 (36)	6 (29)
なくす・壊す		1 (6)	1 (5)	0 (0)
不公平になる		0 (0)	0 (0)	0 (0)
ルールだから		0 (0)	0 (0)	0 (0)
他		1 (6)	1 (5)	0 (0)
計		18	24	23

回答人数：( )内は年齢別の割合、%

(藤崎 (1988) を一部改変)

い、子どもたちは、「園におもちゃを持ってきてはいけない」をはじめとして、「園内では上履きを履く」「登園したら出席シールを貼る」などの社会的慣習、さらには、その園独自のルールに出会うことになるが、その理由付けの理解は長い時間がかかると考えられる。

### 5. 入園に伴う保護者の心配

保護者は、入園にどのようなことを期待するのであろうか。3歳児クラスからの入園を決めた理由を保護者にたずねた結果 (藤崎, 2003) では、「子ども自身が (上のきょうだいの様子を見ていたり、就園前保育を受けたりした経験などから) 行きたかった」(52%) や、「周囲に遊び友達がいない」(48%) が多く、「母親の自由な時間が欲しい」(22%) や「早くから通園した方が子どもの将来に有利」(22%) を上回った。子ども自身も入園を楽しみにしていることがうかがわれる。

入園には、心配や悩みもつきまとう (藤崎, 2003)。入園にあたっての悩みの一つは、生活習慣の獲得のようである。排泄の自立や一定時間内に食事をとること、「おはよう」や「こんにちは」の挨拶をすることをはじめとして、多くの事柄について保護者は入園を意識して獲得への配慮をしている。また、子どもの戸惑いに心配する保護者も多い。園ではトイレを我慢したり、夜寝る前に「明日も幼稚園行くの？」と涙ぐんだり、通園バスに大泣きしながら乗り込んだり、「隣の友達におたれた」と訴えたり、と保護者を心配させることが数多くある。心配事の半数程度は、特に対応しなくても解決するものだが、家族で対応したり、他のお母さんや保育者に相談したりするものもいた。このうち、有効であったのは、保育者や子育ての先輩である他のお母さんへの相談であるようである。

こうした悩みも、9月以降には急速に解消される。運動会で、保護者

から離れて演技をする様子に感激し、お遊戯会では、家でも楽しそうに練習をして、当日も堂々と演技する様子に安堵するようである。ただし、一方で、4月の4歳児クラス進級時には、慣れ親しんだ友達や先生と離れて、新しい先生や新しい友達となることにより、再び不安定になる子どももいる。このときは、「友達の作り方が分からない」などの訴えをはじめとして、友達とのかかわりに関連する不安が強いようである。園生活に慣れるにつれて、入園当初の生活理解や社会的ルール理解を中心とした戸惑いは解消されるもの、友達を求めようになるのにしたがって、友達との関係にかかわる戸惑いが大きくなるようである。しかし、その後、友達との関係を急速に深め、先生の話をするよりも、友達の話をすることのほうが多くなる。大人を中心とする世界から、子ども自身が作り出す世界が広がっていくのが幼児期後半といえよう。

#### ◎引用文献

- ・藤崎春代 1988 幼児の社会的ルールの理解 (日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 296-297)
- ・藤崎春代 2002 幼児の日常生活叙述の発達過程 (風間書房)
- ・藤崎春代 2003 3歳児クラス児の園適応に対する保護者の対応と子育て支援 (日本発達心理学会発表論文集 329)
- ・Nucci, L., P., & Turiel, E. 1978 Social interactions and the development of social concepts in preschool children, Child Development, 49, 400-407.
- ・Smetana, J. G. 1993. (首藤敏充訳, 1995) 社会的ルールの理解 M. ベネット (編) (二宮・子安・渡辺・首藤訳) 子どもは心理学者 (福村出版)
- ・山本多喜司・ワップナー, S. 1991 人生移行の発達心理学 (北大路書房)

## 9. ハヴィガーストによる発達課題

- 1 乳幼児期 (0-6歳) ……歩行、固形食摂取、会話、排泄の仕方、性差、生理的安定、単純な社会的・物理的概念、両親・きょうだいなどの情緒的な関係、善悪の区別、良心。
- 2 児童期 (6-12歳) ……普通の遊びに必要な身体的技能、成長する生活体としての自己に対する健全な態度、友人との仲間関係、性役割、読・書・算の基礎的的技能、日常生活に必要な概念、良心・道徳性・価値判断の尺度、人格の独立性、社会の諸機関や諸集団に対する社会的態度。
- 3 青年期 (12-18歳) ……同年齢の男女との新たな関係、適切な男女の社会的役割、自己の身体的特徴・役割の受容。両親や他のおとなからの情緒的独立、経済的独立についての自信、職業の選択と準備、結婚と家庭生活の準備、公民として必要な知識と態度、社会的に責任ある行動の希求とその遂行、行動の指針としての価値や倫理の体系。
- 4 壮年期 (18-30歳) ……配偶者の選択、配偶者との情緒的生活、育児、家庭管理、職業生活、社会的責任の負担、気心のあった社会集団の発見。
- 5 中年期 (30-55歳) ……成人としての公民的・社会的責任の達成、一定水準の経済的生活の確保・維持、自立する青少年への援助、余暇活動の充実、配偶者との人間的な結合、生理的・身体的変化への適応、老齢の両親への適応。
- 6 老年期 (55歳-) ……身体と健康の減退への適応、隠退と減収への適応、配偶者の死への適応、同年齢の人々との情緒的關係、社会的・公民的義務、身体の衰退に対応した生活の準備。

出典：Havighurst, R., *Human Development and Education*, 1953 (荘司雅子訳「人間の発達課題と教育—幼年期より老年期まで」至川大出版部 1995)

## 10. エリクソンによる発達課題

発達段階	発達課題	成功時の結果	失敗時の結果
Ⅰ 口唇性感期	基本的信頼 vs 不信	基本的人間的信頼	疑念
Ⅱ 筋肉肛門期	自立 vs 恥と疑念	自己統制	羞恥感
Ⅲ 移行性器期	自発性 vs 罪悪感	自発性	罪悪感
Ⅳ 潜在期	勤勉 vs 劣等感	勤勉	劣等感
Ⅴ 思春期と青年期	同一性 vs 役割混乱	同一性	役割混乱
Ⅵ 若い成年期	親密さ vs 孤独	親密さ	孤独
Ⅶ 成年期	生殖性 vs 停滞	生殖性	停滞
Ⅷ 円熟期	自我の統合 vs 絶望	自我の統合	絶望

Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*, Norton. (仁科弥生訳「幼児期と社会 I」みすず書房 1977)

### 発達課題

ハヴィガースト (Havighurst, R. J. 1900-1991) によって導入された概念で、さまざまな年齢段階で達成されることが必要とされる発達の内容。ハヴィガーストは、人の生涯を乳幼児期、早期児童期、中期児童期、青年期、早期成人期、中年期、老年期に分け、それぞれの段階に見合った発達課題を達成することにより、人は幸福になり、その後の発達課題も成功しやすくなるとした。発達課題の内容は、社会的・文化的要請にかかわる課題、身体的・心理的発達にかかわる課題、自我の欲求から生じる課題などである。

乳幼児期には「歩行」、「固形食摂取」、「会話」、「排泄」、「性の相違の理解、性に対するつきしみ」、「生理的安定」、「社会や事物についての単純な概念」、「両親、兄弟、他の人々と情緒的に結びつくこと」、「善悪の区別、良心」などの学習や発達が上げられる。また、

児童期には、「日常の遊びに必要な身体技能」、「自分に対する健全な態度」、「集団生活」、「性役割」、「読み、書き、算の基本的技能」、「日常生活に必要な概念」、「良心・道徳性・価値判断の基本」、「個人的独立の達成」、「社会集団や制度に対する態度」などの学習や発達が挙げられている。

また、エリクソン (Erikson, E. H. 1902-1994) は、パーソナリティの発達を心理社会的な危機の克服の過程ととらえ、人生を八つの時期に分けて、それぞれの時期における発達課題を挙げている。例えば、乳幼児期には順調な母子関係を元に社会に対する「基本的信頼」が形成されるが、それに失敗した場合「不信」が形成される、すなわち「基本的信頼 vs 不信」が心理社会的な危機であり、発達の課題となる。同様に、幼児前期は「自律 vs 恥・疑念」、幼児後期は「自発性・良心 vs 罪悪感」、児童期は「勤勉 vs 劣等感」、青年期は「同一性 vs 同一性拡散」、成人期は「親密さ vs 孤独」、壮年期は「生殖性 vs 停滞」、老年期は「自我の統合 vs 絶望」がそれぞれの時期の発達課題とされる。

(教職用語辞典)

藤崎春代・武井清之

子どもの青年の発達と発達

放談学教育研究会 2006年